

僕の姉さんが死んだのは、二〇〇六年の夏のことだった。た。

二〇〇六年というのは不思議な年だ。その年、海の向こうではモーツアルトの生誕二五〇周年が祝われ、日本では郵便局がなくなつて、かわりに日本郵政株式会社が発足した。

どちらもすぐ前のことのような気もするし、つい最近のことのような気もする。実際には、二〇〇六年は今からきつかり七年前であり、それ以上でもそれ以下でもないわけだが、その七年という月日が本当のところ長いのか短いのか、やはり僕にはよくわからない。

二〇〇〇年代に入ったあたりから、時間の流れがとて希薄に、そして散漫になつたように感じる。それは世界全体の問題かもしれないし、単に僕自身の年齢の問題かもしれない。なにしろ、一九九〇年代には、僕はまだ右も左もわからないような子どもだったのだから。

あの頃、僕は迷子にならないよう、いつも姉さんのスカートの裾を握つていた。旅行でどこか知らない場所に出かけるときはもちろん、見知つた公園や、近所のスーパーや、家のなかでいるときさえも。

僕が思い出す限り、姉さんは道に迷うということがなかった。いつもずっと先のが見えていて、ずっとさきのことまで決めていて、そしてそのずっと先に行くために、必要な道順を迷わずに進んでいた。

姉さんのスカートの裾はいつでも僕を正しい道に導いてくれたが、それは二〇〇六年の夏に、突然どこかにいってしまった。

姉さんは、当時在籍していた大学の池で溺れたらしい。らしい、というのも、僕にとつて姉さんの死はすべて他人から聞いたものであり、どこまでも間接的なものでしかなかったからだ。僕は姉さんの死を見なかった。だから、人づてに知つたそれは薄い膜を隔てたはるか向こうにあり、何の匂いも手触りもなかった。

姉さんは大学に進学してからは宿舍に入つてしまつて盆と正月くらいにしか帰らなかつたし、僕もその頃は部活やら友達やら恋人やら、そういう高校生活にありがちなごちゃごちゃしたものに夢中だった。要するに、僕らはもうそういう年ごろだった。

姉さんの葬式に遺体がなかったことも、その死を僕から遠ざけた要因のひとつだった。姉さんは池のなかに沈んだまま、自分の葬式にも帰つてはこなかった。

池での捜索活動は三日三晩続けられたが、結局姉さんの遺体は見つからなかつたらしい。目撃者が何人もいて、彼女が池に飛び込んだのは確実だというのに、だ。

姉さんと五年遅れで高校を卒業した僕は、迷わず、姉さんが死んだ大学に入学した。

別に、そこで特別何かしたいことがあつたわけじゃない。かといつて、また姉さんのスカートの裾を追いかけて決めたわけでもない。ただ、なんとなく、僕と姉さんとの問題を片づけるには、それが一番都合がいいように思つただけだ。

時間の差はもう埋めようがないが、距離の差ならば埋められる。僕は、できるだけ姉さんの近くに行かなければならなかつた。

◆◆

「あんだ、秋にそっくりだな」

その男が初めて僕に声をかけたとき、僕は迷子になっていた。

正直、大学というものがこうも複雑な構造をしているとは、思いもよらなかつた。構内に入って少なくとも二キロは歩いたはずなのに、まだ目的地にたどり着かない同じようなレンガ調の建物と異様に大きな街路樹がえんえんと続き、同じところをぐるぐる回っているような錯覚に陥る。この地域独特の、風の強さも災いしていた。始終変わる風向きは僕を混乱させたし、街路樹がざわざわと鳴くのも、余計な焦りをあおつた。

そんな迷路のような構内で、彼は突然僕に声をかけた。「……姉を知っているんですか」

男の言葉は道に迷つて困っている新入生にかけるものとしては、あまり適切なものとは言えなかつた。しかし、そのときの言葉が何か他のものだったとしたら、僕は彼を無視して道を急いでいただろう。——秋というのは、他でもない姉さんの名前だった。

「姉？こいつは驚いたね。あんだ秋の弟かい」

そう言うと、男は背を反らせて、大仰に驚いて見せた。よく見ると、彼は男と呼ぶにはあまりにも風がわりな格好をしており、僕は彼に構つてしまったことを少しだ

け後悔した。リボンタイのついたゆったりとしたブラウスはうまく肩幅をごまかしていたが、風に揺れるスカートから突き出た足は明らかに男のもので、ひどくちぐはぐな感じがした。

「ああ、堅苦しいのは無しだ。タメ語で頼むぜ。俺とあんたとの中じゃあないか」

「俺は三輪だ。あんたの姉さんとは同期で、いろいろとよくしてもらったよ。ノートのコピーを交換したり、お互いの字のくせを真似ながら出席表に名前を書いたり、まあ、そんなことだな」

三輪はにやにやと笑いながらそう名乗った。奇矯な振る舞いの割に彼の顔は顎が細く繊細そうな印象で、角度に気をつけてバストアップの写真を撮れば女子学生に見えないかもしれない、と僕は思った。

「でも、姉さんと同じ学年なら、あなたはもうとっくに卒業してるはずだ」

「ふ、青いな。大学は君が思っているほど甘いところじゃない。特に、この大学はね」

彼は赤いスカートを揺らしながら、そんな意味深長なことを言った。それは姉さんのスカートとは全く別のスカートだったが、それにも関わらず、僕はふいに、三輪のスカートの裾を掴みたい衝動に駆られた。

「うちの大学の3Sって、知ってるかい？」

そんなことは気にもかけずに、三輪は気まぐれに話題を移した。

「さあ。スタディ、スポーツ……ステイ・オン？」

しかたがないので、僕は当てずっぽうで適当な返事をした。何となく、大学と聞いてイメージした言葉だ。

「痛いところをついてくるな。でも、はずれだ」

「じゃ、何？」

「スタディ、セックス、スーサイドさ」

「——ずいぶんあからさまなんだね」

「そんなもんだよ」

三輪はにっこり笑った。その唇が赤かったので、僕は彼が化粧をしている可能性について考えた。

それ以降、三輪はことあるごとに僕に付きまとい、相も変わらず似合わない女ものの服を着て、この大学に関するありとあらゆる怪しい話を僕に吹き込んだ。

いわく、宿舍のとある部屋には星を見る少女の首つり死体がある。

いわく、宿舍の部屋割のくじ運が悪いと、五角形の部屋をあてがわれる。さらに悪いと七角形になる。

いわく、この大学は有事の際には皇居になるか、要塞になるか、あるいは巨大ロボットになる。

いわく、この大学は来年度から六学期制になる。

いわく、松美池の鯉を食べると除籍になる。

いわく、地下道に入ると除籍になる。

いわく、第三学群F棟で自殺者が多発する。

「どうして？」

僕は黙って三輪の話聞いていたが、自殺者という単語を耳にして、思わずそう呟いた。——自殺。スーサイド。自分で自分を殺すこと。

姉さんは自殺したんだと、みんな言っていた。

「どうしてって、そりゃあ、三学のF棟が当時じゃこころで一番高い建物だったからさ。どうせ飛ぶなら、誰だってできるだけ高いところから飛びたいと思う。そうだろう？」

「そうじゃない。どうして自殺なんかってことだよ」

——姉さんは、本当に自殺したんだろうか？

大学構内のベドストリアンデッキをあてもなく歩きながら、僕は姉さんの死と自殺との関係性について考えを巡らせた。

確かに、自分で池に飛び込んで、しかもそのまま浮いてこなかったんだから、そういう目的だったのだと考えるのが妥当なんだろう。しかし、あの姉さんが自分で池に飛び込むことを選んだのなら、それはその先のどこかにたどり着くために必要な手順であり、その行為には何か別の名前がつけられるべきであるように思う。例えば、彼女がその先に見ていたのが死であったのだとしても。「気にいらぬからだろ」

「何が？」

考え事をしていた僕は、とっさに立ち止まってそう聞き返した。そして、聞き返してから、そうだ、自殺者の動機の話だった、と思い出した。三輪は僕に構わず先に進み、話を続けた。

「そりゃあ、いろいろさ。たとえば、恋愛とか、成績とか、自分が若くないこととか」

「大学生は、まだ十分若いと思うけれど」

「確かに社会全体でみると若い方だ。でも今まではど若くはない。考えてもみる。今ここにいるあんたはあんたがこれまで生きてきた人生で一番齢を食っている。これって結構絶望的なことじゃないか？」

「そうかな」

「そうだよ。少なくとも、何年もここにいとそういう気分になる。言つたる。スタデイ、セックス、スーサイドさ」

そんなものかな、と僕は返して、再び歩きはじめた。三輪は僕が止まっている間にも進んでいたの、それはちようど、僕が三輪を追いかける格好になった。

姉さんは、失われた若さに絶望して死んだのだろうか。それは姉さんが死ぬための理由としては、あまりふさわしいものではないような気がした。でも、もしもそうだったとしても、姉さんは決して迷わなかったろう。それが彼女の決めた道ならば。

「都市伝説のハナシ、まだ続きがあるんだぜ」

「へえ？」

正直に言つて、もう都市伝説の話を聞く気分ではなかったのだが、僕は一応彼のしたいようにさせるポーズをとつた。

「その名も、地下組織・第四学群」

「ダイヨンガクグン？」

「ああ、おまえは知らないだろうな。二〇〇七年に学群が再編される前は、そういう呼び方があったんだ。基礎科学の第一学群、学際科学の第二学群、そして、応用科学の第三学群。それっきりだ、公式にはな。存在しないはずの第四の学群、それが第四学群さ」

「へえ……」

二〇〇七年。姉さんが死んだ次の年だ。とすれば、姉さんは、第四学群の名称が意味を持っていた最後の年に死んだことになる。三輪の話聞きながら、僕はぐるぐると、そんなどうでもいようなことを考えた。

「第四学群が何かなんて、そんなことは誰も知らない。そもそも本当に存在するのかわからぬ。でも、その入口は学内のあちこちにあつて、除籍云々の禁則事項はたいい第四学群がらみだつて噂だ。今まで何人もが第四学群の謎に挑み、そして散つていった」

「それはご苦労さまだね」

「ご挨拶だな」

構内は相変わらずの強風で、前をゆく三輪のスカートの裾を揺らしていた。軽口を応酬しながらようやく僕が彼に追いついたときには、僕たちは大きな池の前にいた。

「松美池だ……」

三輪は池のほうを睨んで、挑戦的な笑みを浮かべた。しかし、それは彼が戦いを挑むには、あまりにも大きすぎ

る池だった。その面積は池という名称から想像するの
が難しいほど大きく、水は暗く濁つて底を見せなかった。
僕がこの池を見るのは、別にこのときが初めてという
わけではなかった。この大学に入学して僕が一番はじめ
にしたことは松美池を見に来ることだったし、それ以降
の数週間の大学生活の間にも、いくらでも目にする機会
はあつた。それでも、この池を前にするたびに覚える感
覚に、僕はどうしても慣れることができなかった。それ
は寒気のような、吐き気のような、ほとんど自分ではど
うしようもない感覚だった。

周囲が音を失い、ふと、時間が止まつてしまつたたよ
うな錯覚に陥る。風が止んだだけだ、と、僕は自分に言
い聞かせた。池の水面は完全に風いで、鏡面というより
は磨かれたコンクリートの床のようだった。

姉さんはどこに行こうとしていたのだろうか。

僕は腕を組んで、あわ立つ肌をさすつた。

「——なあ、秋が消えたときのこと、知りたいかい」

「消えたんじゃない、死んだんだよ。松美池で溺れ死
んだ」

僕は力なくそう反論した。三輪が姉さんの話題を口に
したのは、初めて会つたとき以来のことだった。

「死体は上がらなかった。そうだろ？」

「……」

どっちにしたつて同じことだ、と僕は思った。この国
の法律では、行方不明になった人間は、失踪して七年で
死亡扱いにできるらしい。民法第三十条第一項。つまり、
どのみちあと三カ月で姉さんは死んだ人間になる。

「なあ、よく考えても見ろよ。いくらでかくつたつて、
海でも川でもない。池だぜ？池の底全部かささらつても
沈んだはずの死体が見つからないなんてことがあると
思うか？」

「つまり、何が言いたいんだ？」

三輪は口の前に人差し指を立てて言った。

「あの日、秋は俺に言つたんだ。——第四学群に行つて
きます、つてな」

第四学群の入り口は学内のあちこちにある——僕は
さつきまでに耳にした都市伝説を、次々に思い出して
いた。そういえば、破れば除籍になるらしい禁則事項には、
姉さんが飛び込んだあの池についてのものもあつた。

——いわく、松美池の鯉を食べると除籍になる。